

当会の会報に毎月ハイクアートをご提供くださっている池田亮二さんは、毎日一枚、世の中の出来事を絵手紙に描いておられます。「一日一枚ニュースな絵手紙」と名付けて描き始めてなんと二十四年！

毎年十二月には、一年の出来事を振り返る「池田亮二の絵手紙展」を開催されていましたが、去年は残念ながら中止となりました。

そこで、昨年展示されるはずだった作品の中から自選していただいたアートと、文章をお送りいただきました。予定されていた作品のごく一部ではありますが、紙面にてご紹介させていただきます。

#### ◆池田亮二 選 ～絵手紙で振り返る令和二年～

##### 一、国民総マスクの不気味

###### 夜目遠目安全不気味マスク顔



田舎の小学校に通っていた頃、東京から転校してきた色の白い子が、ちょっと風邪が流行るとすぐ白いガーゼのマスクをしてくる。なんだおしゃれしやがって、と田舎っ子たちは反感をもったものだ。風邪なんぞ勝手にかかって自然になおるもの、と咳もくしゃみも平気でまき散らしていた。それでもお下げ髪の少女が小さなマスクをして大きな眼でじっと見つめる顔は、何かナゾめいた

風情で男の子の胸をときめかせることもあったが。

男のマスクなど、せいぜい医者か忍者か鞍馬天狗がつけるもの、それがかくも重要な防護装備になろうとは。今やマスクなしのむきだしの顔は、バイキンのように憎まれる逆転の世だ。それにしても顔の大部分を蔽って、笑っているのか怒っているのか、眼ばかりのぞいているのは薄気味悪いと思うのは私だけだろうか。

## 二、お客様は疫病神？

### 爆買いの群なつかしや閑古鳥



若者は渋谷、原宿の方に流れ、年寄りも巣鴨、そして銀座、浅草はもっぱら爆買い観光の外人部隊の群れ。大型バスで乗りつけ大きなトランクを引きずりながら、派手な服装の中国人たちが嬉々として、家具、化粧品、宝石なんでもござれと札ビラをきる。

浅草界限では、貸衣装の派手な振袖を召した<sup>くーにゃん</sup>姑娘や金髪ギャルが人力車で颯爽と駆け巡る。東京っ子のいない銀座浅草なんか…、と愚痴っていた旦那衆も、こうなるとやっぱりお客様は神様、背に腹は替えられないと「歓迎光臨（いらっしやいませ）」のプラカードを掲げて、今年も千客万来の春節となるはずであった。それが見事に裏切られ、花見もホコ天もお祭

りもすべて中止。わが世の春と街中を駆けずり廻ったのは猫や鼠。

賑わいのない銀座は銀座じゃない！ あの神様たちは今どこにいる。また戻って来る時があるだろうか。

### 三、大相撲も下剋上

泣く大関笑う幕尻千秋楽



子年の年賀状に「ねずみ騒ぐな猫捕るな」と書いたが、その年明け早々の初場所、前頭どん尻の徳勝龍が気鋭の大関貴景勝をぶん投げて優勝してしまった。徳勝龍関には失礼ながら、ねずみが猫を食べてしまったようなもの。これが競馬なら万馬券ものだ。更に八月場所にも、前頭どん尻の照ノ富士が大関朝乃山を転がして優勝する。この他にも秋場所では幕尻翔猿が、あわや優勝かと上位力士をほんろうする。こうなると横綱大関の面目丸つぶれである。

百キロ前後の小兵力士が二百キロの大兵肥満をひっくり返す。いかにもねずみ年にふさわしい相撲の醍醐味を味わわせてくれた。